



エイズになると、どうなるの

いろいろな病気にかかりやすくなる

エイズというのは、ヒト免疫不全ウイルス（HIV）という、ウイルスの感染によって引き起こされる、さまざまな病気の状態をさすことばです。

わたしたち人間の体には、体に入ってきた細菌やウイルス、カビ、微生物などや、がん細胞など、病気のもとになるものから、体を守る免疫というはたらきがそなわっています。

そのはたらきの中心になっているのは、血液にふくまれている、いろいろな種類のリンパ球という細胞で、指令を出しているのは、ヘルパーTリンパ球という細胞です。

ところが、エイズウイルスは、指令役のヘルパーTリンパ球に入りこんで、これをこわし、自分と同じウイルスをどんどんつくって、増えています。

指令役のヘルパーTリンパ球がいなくなると、いろいろな種類のリンパ球がはたらけなくなり、体を守る免疫というはたらきがなくなるため、エイズウイルスに感染した人は、いろいろな病気にかかりやすくなるのです。

エイズウイルスが、なぜできるかはわかっていない

エイズウイルスは、エイズという病気を起こす、小さな生き物です。

ウイルスは、ふつうの顕微鏡では見えないくらいの小さな生き物で、動物や植物に入っで生きており、大きさは、だいたい4～10ミクロン（1ミクロンは1000分の1ミリメートル）です。

エイズウイルスについては、まだ、発見されたばかりであり、エイズという病気を起こすもとになっていることや、ウイルスのつくり、増え方がわかっているだけで、まだ、どのようにしてできたかについては、わかっていないのです。（監修・保志 宏）

